Realize

弦月

今朝のぐずついた天気が、どうしようもなく気に障っていた。曇り空、夜か昼かさえ分からなくなりそうなほど低く垂れ込めた雲が空を覆い尽くしている。それでも授業は滞りなく進むし、誰も何もそれに影響されることはない。されているとすれば、今この俺の心理状態、くらいか。

昼休みが終わる五分前、俺は隣の級友に声をかけて教室を後にした。引き止める者はどこにもいない、返って来るのは『またかよ？お前、本当に懲りないな』という一言だけ。

そんなことはとうに分かりきっていたが、まるで今更蒸し返すほどさして重篤な問題でもなかった。少なくとも、俺にとってはどうでもいいことだ、今日もニュースで誰かが死んだ、と聞かされるくらい。

外へ出るとかろうじて空は止んでいる。別に濡れても構わない考えでいたが、服も鞄も濡れると面倒極まりないから降らないならそれに越したことはない。特に安堵するわけでも感謝するわけでもなく一歩を踏み出した。

街は俺に無関心だ、同時に俺も関心を持つことはない。それゆえ、制服姿の男子生徒が白昼堂々繁華街を闊歩していても誰も咎めることもない。もちろん、仮に引き止められた際の言い訳も幾通りと考えてあるし、既に実践したこともあるにはあるが。ゲーセンで時間を潰し、電気屋を冷やかしに一巡し、日が暮れかけた頃を見計らって自宅へ辿り着く。人は居ない、わざわざ居ない時間を選んで帰ってきている。

玄関の扉を閉めるのと同時に、部屋の奥から短い鳴き声とともに小さな物音があがった。緩慢な動きで黒い影、暗褐色の毛並みの猫が足元へ近付いてきて俺の踝辺りで喉を鳴らす。腰を屈めて手を伸ばし、彼女の首筋を撫でようとしたその手は次の瞬間嫌われたように振り解かれた。

……賢い奴だ、こっちが手ぶらだと知るや否や擦り寄るのをやめて自らのテリトリーへ帰っていく。俺はその態度に感心さえ覚えながらユカワ――ふざけた話だが、この猫の名前だ――の後ろ姿を見送ると自分の部屋へと向かった。

鞄を置くとまず真っ先にパソコンの電源を点けて、デスクの前に腰を下ろす。ネットで軽くニュースを読んだ後、メールボックスを開いて溜めていた分をチェックしていく。揃いも揃って片っ端から迷惑メール、一件一件飽き飽きしながら削除していって――そして最後も件名のない、送信先も覚えのない出鱈目な英文字のアドレス。うんざりしながらマウスを動かし――右クリックしようとしたその瞬間だった。

何時の間に部屋に入って来たのか、足元でちりんと軽く鈴の音が鳴る。かと思えばしなやかな動作で膝の上に突然跳び乗ってくる影、

「……っこのバカ……っ！」

誰にともなく悪態をつきながら、舌打ちをする。ポインターが当てられたメールが、いつの間にか開かれていた。どうやらユカワが机の上のキーボードを押してしまったらしい。目の前でやんちゃに暴れる彼女を抱えるようにして動きを押さえつけ、ともかくもディスプレイに向かった。

――メールに添付された怪しげなファイル、それがこちらが操作もしていないのに起動している。止めようとしたが、もう遅かった。開かれたプログラム――はらはらしながらその行く末を見ていると。

突如画面に、ハイティーン、中高校生くらいかと思われる少女の姿が映し出される。上半身―

―胸から上だけの姿。やや上方から見下ろす形のカメラアングル、鳥瞰で現される風景。閉じられていた瞼が、ゆっくりと開かれて、視線をこちらへ投げかけてくる。最初写真か何かか、と思ったが、亜麻色の髪と深紫の目、それはこの世に実在する人のものではない、とすぐに分かった。

ついでに言うなら、着ている服もどこか現実世界から浮いている。淡いブルーのワンピース、頭には大きな赤いリボン。俺の脳裏にはどこかの童話の登場人物が連想される。次の瞬間、信じられないことになんとそれはこちらに向かって笑いかけてきていた。

『おはよう、博士』『あ、ごめん間違えちゃった。今もう夕方ね』『やだ、私ったら寝過ごしちゃったみたい』『なんで起こしてくれなかったの、もう？』

画面の上に、次々と言葉が並べ立てられていく。同時に、それに合わせるように少女の表情が移り変わっていく。最初は仲間に挨拶するらしい気さくな笑顔、それが驚いて、怒って、最後には拗ねているようだった。なんて滑らかなその動き、画像自体はやや粗くアニメーションの域を出ないが、表情の一つ一つがとても自然で滑らかだ。……まるで本当に自分の意思で動いているんじゃないか、とほんの一瞬でも錯覚したくなるくらいに。

画面は二分割されていて、上には“彼女”の言葉が並んで、消えて、また並んでいく。そして下には、先程からちかちかとカーソルが瞬いていた。にわかには信じられない――まさか、と思いながらも俺はキーボードに手をかけた。

『お前は何者だ？』――入力して、エンターキーを押す。やや間があって、彼女がそれに『返答した』。

『やだぁ、博士ったらまたそれ？』『もう飽きちゃった、何度同じこと言わせるつもり？』

――通じた。信じられないことに、コンピュータと会話が成立しているだと？驚いている間に、彼女は自己紹介を始めてきた。

『私はキャトル、四番目。誕生日は20XX年4月1日、一応日本人、もちろん国籍はないけどね。８ヶ国語までは対応してます。仕事は博士のプライベートな秘書にして、忠実なる部下兼忠実なペット。……どう、これで満足？』

そこまで一通り言い終えて、彼女が誇らしげにピースサインを見せて笑う。向こうの説明が途切れたのを見計らって、俺はまたキーを叩いた。

『俺の名前は恒一。事情のさらなる説明を求める』

――彼女が躊躇った。比喩とかたとえとか、そんなんじゃない。確かに表情を曇らせ、躊躇っていた。首を傾げる仕種を見せて、眉根を寄せる。どこまでもそれは、プログラムらしからぬ行動様式。やがて、その動きがフリーズしたかのごとく停止した。

『ここ……博士の家じゃない？』『やっぱり、ここ博士のパソコンじゃない！どういうこと！？』

言葉に合わさるよう、画面の彼女が驚愕の表情を見せていく。

『どういうこと……じゃああなた一体誰！！？』

そう言う彼女は完全にもう混乱しているのか、まるで今にも泣き崩れそうに見えた。――そんなはずないのに――肩は小刻みに震えて、引き絞られた瞳と視線が交差するかの錯覚を覚える。

その動作に何とも言えない気詰まりな心地を感じながらも、俺は彼女に説明するよう言葉を選んで入力していった。できるだけ簡潔な文章を、出来うる限り適切な順序でインプットする。
　まず俺は一介の高校生で、『ここ』は俺の私物のパソコンだということ。そして差出人不明の不審なメールを間違って開いてしまって、同時に添付されていたプログラムが自動的に立ち上がって今に至る、というような内容を。彼女はそのどれもに不安げで悲しげな態度を見せていた。けれど、今自分が『居る』のが普段とは違う場所だ、ということは分かるらしく、最後には納得してもらえたようだった。
『今度はこっちから質問だ。『君』は一体誰だ？『博士』っていうのは君を作った人のことか？』
　すると彼女は突然黙り込んでしまった。俯いて、顔を伏せて両手を落ち着きなく組み合わせている。
『ごめんなさい、私はまだ実験作だから……“外”の人と話したことまるでないの』
　たどたどしく、今までの能天気な明るさは一体何処へやら。そう、それはまるで幼い子どもが人見知りするかの急激な変化だった。
『私の名前はキャトル、四番目。博士は、博士――そう、私を作った人』
『……なんで？博士は私を捨てたってこと？私のこと、要らなくなっちゃったのかな……？』
　そこまで言うと、また伏せて黙り込んでしまう。その動きは見た目以上に幼く稚く、どこかアンバランスにも映る。それにしても、なんかいちいち調子が狂うな……。
『泣くな、まだ捨てられたって決まったわけじゃない。本当に必要なくなったなら削除するのが普通だろう？』
　考えた末、選んだ台詞は自分でも信じられないものだった。まったく、一体どうなってる？プログラムを『慰める』だなんて。
『君の元いた場所を探してみよう。俺も協力する』
　正直こんな言葉で伝わるとは思っていなかったが、それを聞いて彼女はもう俯くのはやめていた。
『ありがとう。――そうだ、聞き忘れてた。あなたの名前は？』
　機械なのに、と言うべきか、機械だから、と言うべきか。ふらっと気まぐれに気さくな情緒を取り戻した彼女に、俺も気楽に受け応える。
『秋山恒一。一応ルビも打つと、あきやま・こういち、だ』
　その気の置けない性向は素直に快いと感じたが、俺は別のところで彼女の存在に興味を惹かれていた。彼女の由来――もっと言うなれば、彼女を作った『博士』という人物に、だ。こんな、現代の科学技術をはるかに凌駕したプログラム――とても個人で作り上げられたものだとは思えないが……。一体どうやって、何の目的で作られたのだろうか？
『よろしく、コーイチ！』
　キャトルは嬉しそうに微笑んで、できるわけもないのに握手を求めるかのように片手を差し出してきた。それに思わず苦笑いをしながらも、こっちもよろしく、と打ち返す。ふと視線を落とすと、膝の上でユカワが呑気に欠伸をしているところだった。

　至極当然の話だが、インターネットというのは世界中を介している。残念ながら、キャトルを添付してきたメールの差出人を突き止めることはできなかった。ご丁寧にも足跡が消されていたのだ。彼女が日本語を母語としていることから発信源が日本のどこかだろうとは思われたが、それにしたって百パーセントではない。キャトル自身も“記憶”を探っていたようだが、たいした手がかりは見つからなかったそうだ。彼女いわく、『記憶が消されている痕跡がある』、とか何とか。
　ただでさえ謎だらけなのに、調べれば調べるほど余計に深まっていく。『博士』という人物は自分に関するデータを消去し、彼女を手放し、一体何を考えているのだろう？
「ただいまー」
　そんなこんなで翌日、俺は学校帰りに電気屋に寄って帰宅した。例によって出迎えたユカワが、玄関先に俺が置いた紙袋を不審気に警戒している。
「悪いな、今日もみやげはないよ」
　軽く声をかけて、また自室へと引きこもった。持ち上げた袋は、両腕いっぱいに筋肉が痙攣しそうなほど過剰な重量を訴えている。昨日と同じように、部屋に入ると同時にパソコンを立ち上げる。けれど、昨日までとは明らかに違う点が一つ。
『おっはよ～！あれ、こんにちは？』『慣れないなー、博士は朝起こしてくれてたから』
　何も操作していないのに、勝手に彼女が起き出して、動き始めた。背伸びをして、起き抜けの人間のように身体を動かしたりストレッチなどをして見せる。……まったく。機械のくせに、必要以上に無意味に動作が人間らしい。一体どういう教育をされてきたんだか……。
「バカ、こっちにもいろいろ事情があるんだ」
　半ば呆れながらも、弁解するように言葉を打ち込む。
「言っただろう？俺は高校生だ、って。平日には学校があるんだ」
　けれど彼女は腕を組み、機械とも思えぬほどの横柄さで人間様に逆らってくる。
『けど、昨日はもっと早かったわよ？どうせさぼってたんじゃないの～？』
　……痛いところを突いてくるな、まったく……。真実だけに言い返すこともできない。コンピュータに言い負かされると思うと少し悔しくなって、俺は意地になって打ち返した。
「それに、今日遅くなったのは学校のせいだけじゃない。ちゃんと買ってきたぞ」
　そして、苦労して持ち帰った荷物を机の上へと乗せる。
　昨日、彼女がいくつか提案したことがあった。自分には音声認識システムも備わっていて、マイクとスピーカーさえ用意すればこうしてキーボードを打たなくても意思の疎通ができる、ということ。そしてさらにカメラがあれば周囲の映像から情報を取り込むことも出来る、とか何とか。それでこうして近所の電気屋を回ってわざわざ使えそうなものを探してきた、というわけだ。中古とはいえ、学生にはやや高価な買い物だったがまぁこの際文句は言うまい。
「それで、一体これをどうすればいいんだ？」
『いい？今から私の言う通りにセットしてね』
　彼女の指示に従って、機材を設置していく。ものの数十分で、俺のデスクは軽くどこかの大学施設の研究室並みになった。
『あー、まいくてす、まいくてす――』

スピーカーから、雑音混じりだが確かに女性の声が聞こえてくる。驚くべきは、そのイントネーション。まるで誰かが動きに合わせて声を当てているんじゃないか、と思えるくらいに自然で無理のない動作。例えばよくある映像の鈍化や質の低下は一切起こらないし、それどころか、『声』という多次元の情報を与えられたことで一層彼女の存在に現実感が増すかのようだった。その様子は水を得た魚、とすら言っても差し支えないだろう。

『うん、おっけー。ありがとね、コーイチ』

驚いた。素直に信じられない。なんて、予想外なクオリティ。なんて桁外れな高スペック。予想以上に敏捷な処理能力。そして何より、『自分の話す台詞を自分で選ぶ』というイレギュラーな性格。そんなのもう、機械や道具の範囲を越えてるぞ……？

だけど彼女はそれでも不満なのか、直後に口をへの字に曲げてしまった。

『でもこれ、声が気にいらないのよね～。まだ研究段階だったからね』

「バカ、それで充分だよ」

思わず声に出して、伝わるわけないと反省してキーボードに手を伸ばす。けれど彼女はきゃらきゃらと笑いながら口を挟んできた。

『大丈夫、おかげでもう聞こえてるわよ。あなたが私の『耳』を用意してくれたからね♪』

もちろん彼女が言う『耳』とは、俺の買ってきたマイクのこと。こんな本気で間に合わせの機械しか用意できなかったが、どうやらそれで充分らしい。何にせよ、手動での入力の手間が省けたことは単純に有難い。俺は他と比べてもパソコンに向かってる時間が多い人間だと思うが、それでもさすがにキーボードを叩くよりは口頭で話した方が楽で早いに決まっているから。

「了解。それじゃお前の機能も向上したところで、今後の方針を議論しようか」

『おっけ～。で、そっちからは何か意見ある？』

わざと難易度の高い言葉を選んで話しかけてみたが、意思疎通にはまったく影響なさそうだった。……まったく、若干悔しいが彼女の優秀さにはほとほと驚かされるな……。

「こちらからは何も。ていうか、正直お手上げって感じだ。できればお前の方から何か提案してくれると大変有難い」

『う～ん、そうだなぁ……』

そして彼女が、何事か考えている様子を見せていると。突然、両手を打ち合わせて満開の笑みを見せた。

『決めたっ！コーイチ、“外”に行こう！！』

「……はぁっ！？」

――コンピュータプログラムにとっての『外』。それは、自分の存在する本体以外の場所を差す……らしい。
今、『彼女』は俺のケータイの中にいる。もう少し正確に言うなら、自宅のパソコンからネット回線を介して彼女のデータの一部を携帯端末に通信している。俺にもそこまで詳しい原理は分からないが、とりあえず俺のケータイがパケット定額で良かった、と切実に思っているところだ。今、ケータイを開くともれなく待ち受け画面に彼女の顔が登場する。
「……おいキャトル。お前本当、何考えてるんだ？」
日の暮れかけた商店街を歩きながら、俺は電話口に話しかけた。多分受話器のマイクにさえ声が届けば伝わるのでよくあるゲーム機みたいに口を近づけて喋るだけで充分だと思うのだが、さすがに携帯に向かってそれをやると若干危ない人になりかねないからこういう風に、普通に通話するのと同じ格好を装って彼女に話しかけている。
『何考えてる、って？そうね、特にこれと言った意図はないけど……自分の知らない世界を見てみたい、って思うのはとても自然な考えだと思わない？』
「思わない？って言われてもな……」
そういえば、よほど自分の“声”が気にいらなかったのか、彼女はネット上を探して自力で好みのデータを見つけてきて、あまつさえ取り込んでしまった。彼女の声は今テレビでも良く聞かれる有名な声優の声をしている。……著作権に引っかからないのか、それだけが唯一心配だ。
「じゃあとりあえず、適当に街を回って適当に気に入りそうなものを映して送るから。それでいいか？」
『うん、おっけーおっけー！楽しみにしてるよっ♪』
彼女の突き抜けて明るい声に、激しい脱力感と眩暈と頭痛が一気に襲いかかる。……おいおい。何が悲しくて、プログラムに自分の住む町を案内しなきゃならないんだ？
『あっ！コーイチ、今のトコもっと見せて！』
それから俺が送ったデータに対するキャトルの食いつきようといったら半端じゃなかった。ファーストフード、駅、デパート、道路。そんな何でもない風景にさえ、彼女は喜んで関心を示した。特に電気屋なんかはとりわけ興味を惹かれたらしく、小一時間かけて巡回しまくった。はしゃいで、浮かれて、騒ぎ立てて。かと思えば今度は『あれ何？』『それ何？』『これどうなってるの？』……やら何やら、ほとんど矢継ぎ早に俺に詳しい説明を求めてくる。まるでまったく、その反応は幼い子どもそのものだ。なら、さしずめこっちは保護者、ってところか？……やれやれ、世話の焼ける……。
呆れながらふと時刻を確認すると、思っていた以上に時間が過ぎていたことに気がつく。ついでに、充電も残り一つだ。
「おい、そろそろ帰るぞ。電池も切れそうだし」
『え～っ！！？』
俺がそう言うと、キャトルがこれ以上ない、ってくらいの大音量で異議を唱えた。電話口からしばらく耳を離し、途絶えたところでまた近付ける。
「駄々こねてもダメなものはダメ。……また、時間があったらいつでも紹介してやるから」
話しかけた声は、自分でも信じられないほど穏やかだった。確かに始めこそ渋々と付き合って

いたが、結果的にはこちらとしてもなかなか有意義で楽しい時間だったかもしれない、と不意に思う。誰かに街を、案内する。改めてそうした立場から見つめなおしてみると、見慣れた街もまた違った視点で見えてくるものだ。
『コーイチ、最後に一箇所、お願い！』
　するとらしくなく切羽詰った声で、キャトルがそう頼んでくる。
『さっき、一番最後に送ってくれた写真に写ってる雑貨屋さん。行ってみたいな！』
　見ると狭い画面の中で両手を合わせて、懇願している彼女の姿がいた。
「分かった分かった、それで最後だぞ？」
　言われて、初めてそんな場所に店があったんだ、ということに気が付いた。よく通る道の傍だったが、あいにく当然俺みたいのにはこんな場所には縁があるはずもない。ショーウィンドウ越しに中を覗くと、大半が女性の客しか見えなかった。若干抵抗を覚えつつも、ドアをくぐって中に足を踏み入れる。
　ファンシーな雑貨を集めた、確かに若い女性に受けそうな店だった。ぬいぐるみだとかアクセサリーだとか服だとか、全体が甘く可愛らしい雰囲気に包まれている。……うわこれ、俺絶対浮いてるし。店の中を、店員に不審に思われない程度に何枚か適当に写して送る。数秒後、彼女から電話で反応が返って来た。
『ねぇねぇ、コーイチ！あのネックレス欲しい！三枚目に写ってたやつ！』
「……はぁ？バカだな、欲しいも何もお前どうやって――」
　言いかけて、けれど次の瞬間即座にピンと来る。
「なるほど、そういうことか」
　指示されるがままに、言われたネックレスを今度は正面から写真に撮って送る。
「……ね、似合う？」
　ややあって、携帯のディスプレイを見るとそこには例のネックレスを胸にかけたキャトルの姿があった。どうやら、自分自身で画像を加工したものと見える。その無意味な労力と能力の高さに半ば呆れながらも、俺は苦笑混じりにこう返す。
「あぁ、似合ってるよ」
『ありがと、大事にするねっ！！』
　そう言って、笑う彼女の笑顔のまるで屈託のないこと。見つめられて、逆にこっちが気恥ずかしくなってしまうくらいだ。――その仕草だけ見ていれば、軽く勘違いもしたくなる。それそのまま実在する女の子なんじゃないか、なんて。馬鹿げた幻想のひとつくらい浮かべたくなるほど、彼女の表情は生き生きと鮮烈なものだった。

　案の定、と言うべきかおかげで充電はすぐに切れた。とぼとぼと帰宅して自分の部屋へ帰ると。そこにはまた俺の想像を絶する、予想外の光景が広がっていた。
『きゃ～！カワイイ～！！』
　……一瞬、何が起きてるのか、何がどうなっているのかさっぱり分からなかった。パソコンを乗せた机、そのディスプレイの前でふらふらとせわしなく動くユカワの姿。一方、画面の中でキ

ャトルが片手に何かを持って、ぷらぷらと動かしている。その何か――近くまで寄って行って、やっと分かった。
『あっ、おかえりコーイチ！遅かったね？』
　パソコンに取り付けたカメラの視野にようやく俺を認めて、彼女は振り向いてくる。その手にあるのは、こともあろうに――ネコじゃらし、だった。……前代未聞だ、ネコと戯れるプログラム、だなんて。
『このコかわいいね！名前、なんて言うの？』
「……ユカワ」
　俺が答えると、彼女が目をまんまるくして固まってしまった。……無理もない。普通の“人”なら、きっとそれが自然な反応だ。
『は？』
「だから――」
　音声で伝達するのはなんとなく難しい気がしたので、今度はキーボードを引き寄せて文字で直接入力してやる。ややあって、向こうが『変な名前ねぇ』、と訝しい表情をみせた。無理もない、事実俺だってそう思う。
　その間も、『彼女』は画面の中の見知らぬ少女に興味津々だ。時折手を伸ばして、届くか届かないかきわめて微妙な距離で振り動かしている。見ていて画面がいつそのツメで傷つけられるか気が気でなかったので、彼女を抱いて一旦手の内に収めた。そういえば昨日も今日も部屋の扉はちゃんと閉まっていたはずなのだが……やれやれ、とうとう自分でドアを開けることを学習しやがったか。
「……何考えてたんだろうな」
『ん？どしたの？』
　思わず呟いた独り言に、キャトルが即座に反応してくる。
「だから、お前を作った奴のこと。『博士』ってヤツは、本当に一体何考えてたんだろうな、って」
　俺の腕の中でユカワが束縛されるのを嫌うよう、煩わしそうにもがいている。分かった分かった、と彼女の意思に沿うよう床に下ろすと、俺はキャトルに対するよう椅子を引いて腰掛けた。
「だってそうだろ？世の中に、ネコの相手が出来るプログラムなんて必要か？」
『なによぉ…それって私のことバカにしてる？』
　俺の言葉に、見るからに不機嫌そうな表情を見せるキャトル。むぅ、とふくれて拗ねたような態度で返してきた。
『確かに、コーイチの言いたいことも分かるよ？あたしは通念的なプログラムの行動様式からは外れてる、それは言われなくても充分分かってるつもり』
　よっぽど俺が言ったことが気に障ったのか、彼女はらしくなく横を向いてしまうと子どもっぽく唇を尖らせる。
『けど、仕方ないじゃない。私はそういう風に作られたんだもん。〝自分のやりたいことをやる〟って風に』

　それは俺に抗議している、というよりはむしろ自分自身に言い聞かせるかのような調子だった。
『あぁ、そういえば――』
　と、そこで突然何かを思い出したかのごとく正面に向き直り、俺に向かって話しかけてきた。
『博士が前に言ってたわ。自分の目的は自分にしか出来ないものを作ることだ、って』
「へぇ……自分にしか出来ないものを？」
『うん。だから、自分はそんなプログラムを作りたい――自分にしか作れないものを作ることで、自分が生きた証を残したい、って』
　そこまで言って、キャトルが唇を歪めるように笑う。いつもと違う、少し憂いを含んだ悲しげな笑み。心なしか、続く言葉もやや重たく沈んでいるかに俺の耳に届く。
『博士のやってたことは、結局矛盾してるんだけどね。人間のリアルな感情や固有の表情――それを無機質で機械的なプログラムとして読解し直して、書き換えるってことだもの』
『だから私は実験作。何処までいっても、出来損ないにしかなり得ないのよね』
　――それは初めて見る、彼女の“本音”だったかもしれない。今までとはまた対照的な、どこか自嘲的な顔色。もはや驚くべきは、『そんな表情が出来る』というよりも『そんな感情を抱くことが出来る』というその観点だった。
『だけど博士は、そんな私にも“存在意義”を与えてくれた。こんな私にも、ううん、こんな私だからこそやれることがあるって、言ってくれたから……』
　――独り言にも近い彼女のモノローグ。それでも、彼女がどれだけその『博士』とやらを敬ってるのか感謝してるのか、それだけは充分に伝わってきた。彼女にとってそれは、創造主であると同時に親でもあり、そして何より存在理由そのものなわけだ――
　見ず知らずの他人であるはずなのに、彼女の話を聞く限り『博士』にはどうにも妙な親近感を覚えてしまう。思わず表情を崩して、俺が話しかけようとしたその時、
『あ……ごめん、ちょっと疲れちゃった。少し寝ててもいい？』
「あぁ」
　プログラムの彼女が“寝る”、そんなあべこべなセリフにも、俺は違和感なく答えていた。まもなく彼女が画面から消えて、直後にパソコンが省電力状態になる。意味はない、と分かってはいてもそれに合わせるようスタンドのライトを落とす。脳裏には、彼女のセリフがまだ鮮やかに色を残していた。
　『自分のやりたいことをやる』――確かに彼女はそう言った。『自分はそういう風に作られた』、と。それは、人間なら不自然でも何でもない、至極当然でありふれた行動原理だ。けれど、言うまでもなく人に使役される機械がそれを“思う”のは、どこまでも飛びぬけた発想だ、と言わざるを得ない。
　この一日二日で、何がなんだかさっぱり分からなくなってしまった。彼女に出会ってから、技術どうのこうのも跳躍して、プログラムの在るべき姿、それらの存在意義、そんなことにさえ疑問を抱きつつある自分がいる。『キャトル』という存在は一体何者か？――それはもはや、一個の人格を読み解くことに等しい。だからとにかく今はこう結論づけることで精一杯だ。彼女の存在はまったくもってイレギュラーだ、と。

　考えているそのうちに段々頭が痛くなって、思考を切り替えるよう深く息をついて首を横に振る。何時の間に机に上ってきたのか――横では懲りずにまた、うちのバカ猫が真っ暗なディスプレイに向かって手招きを繰り返していた。その様子に、俺は思わず苦笑しながらも胸の内で話しかける。あぁそうか、やっぱりお前もそう思うか？
　――彼女がプログラムだなんてこと、すっかり忘れてしまいそうになる。作られた存在。0と1の、二つの数字のみで構築された世界。実体を持たない、計算機というハードがなければけして存在の仕様がない曖昧な様相。それでも……彼女は確かに、自分の意思を持って、考えを持って、生きてるじゃないか。
　隣を真似て伸ばした指は、かちんと冷たい液晶に触れる。
　……その向こうですやすやと寝息を立てる彼女の姿を意味もなく想像してしまい、またも素直に笑みが零れた。――彼女の正体。その真実に興味がない、とは言わない。ただそれでも、今ここにこんなふざけた存在がいるってことは紛れもない真実だ。
「――ほら、こっちも休憩するぞ」
　彼女を抱き上げて、部屋を後にする。廊下に出る寸前、ふと深い考えもなくおやすみ、と語りかけて部屋の電気を落としている自分がそこにいた。

俺が一階で遅い夕食を済ませて部屋に帰ってくると、まだキャトルは寝ているようだった。どうやら、睡眠というよりはプログラムのクリーンアップをしているらしい。画面の隅で、細々と色つきのグラフが動いている。おそらく周期的に、一定の時期が来ると自動的にデータを最適化したりカスタマイズするよう命令系統に組み込まれているのだろう。

自分でも奇妙だなと思いながらも、なんとなく起こすのは忍びなく思えて、こっそりと静かに音を立てずパソコンの前に座って、マイクロフォンの電源を落とす。そして普段自分がそうするように特に意味もなくネット上を回りながら、時間を潰していた。もはや習慣になっているニュースを見終えて、何とはなしにユカワに新しい玩具でも買ってやるか、と関連サイトをあさっていく。

やがてそのうちに軽い電子音が鳴って、メンテナンスの終了を告げる。その時初めて、俺はデスクトップに見覚えのないファイルが存在していることに気が付いた。やや躊躇ったが、半ばヤケになって開けることにする。いいや、どうせ仮にもしウィルスだったとしても消えて困るデータもないし――。画像か何かか、あるいはまたこれもプログラムの一部か？

だが、予想に反して立ち上がったのは文書データだった。すぐに開けて読んでみる。そこには、

《困ったことに私にも何故、このような事態になったかは一切不明だ》

やけに突き放した感じのする硬質な文体。長々と画面を埋める独白は、すべてその一文で始まっていた。

《おかげでプロジェクトはほぼ一からの撤回を迫られた。ただでさえスケジュールに一切余裕がないというのに……まったく、実に運が悪いとしか言いようがない》

《それは一言で言うならば、プログラムの偶発的なミス、俗にバグと呼ばれるもの》

《本来ならばデリート、あるいは正しいデータに書き換えるところだが、非常に珍しいケースなのでこのまま保存し、様子を見ることにする》

《私は彼女を『アン』と名付けた。今後の研究次第では、それなりに利用価値のある素材になるかもしれない》

《いや……なってもらわねば困る。我々の輝かしい未来のためにも》

――全てを読み終えて、俺は即座に文書を破棄した。“彼女”が起きる前に、跡形も無く消してしまいたかったのだ。彼女が気付く前に、真実を知る前に。この場合、“思い出す”と言った方が正しいのだろうか？

いや……それでも彼女が、この真実を全部知っていたとは俺には到底思えない。おそらく、彼女は『何も知らされずに』利用されたんだ……

――それは、それが、俺の、俺たちの求めていた真実。

何故、どうして。頭の中は、それでいっぱいだった。あれほど自分自身知りたがっていたはずの答えなのに、今は知らなければ良かった、と後悔すらしてしまう。いくらなんでも、こんなのあまりにも――。

ふとそこで、ぱっと画面が明るくなる。どうやら、彼女が起きてきたようだ。つまらないところにリアリティを追求している、と言ってしまってはアレかもしれないが、本当に寝起きみたいな、惚けたような顔をしている。

『あれ……コーイチ、そこにいるの…？』『おはよ……ごめん、ちょっと寝すぎちゃってたかな？』
「いいよ、無理しないで寝とけって」
　話しかけた俺の言葉に、いつになくおとなしい態度でキャトルは頷いた。再び画面から彼女の姿が消える。それを見て、俺も本体の電源を切った。暗くなる画面――同様に、目の前も真っ暗になる。目を閉じると、しばらく長い間彼女の色彩のコントラストだけが視界に眩しく残像を残していた。

　次の日の朝、俺は普段どおりの時間に家を出た。けれど、向かったのはいつもどおりの場所ではない。電車に乗って、そこから一時間はかけて都心へと。満員の車内に詰め込まれながら、スーツの波に紛れてオフィス街で降車する。
　一晩悩み抜いて出した結論は、とにかく直接事の真偽を確かめること、だった。何が真実で何が虚偽かは分からない。分からない以上、今はそれを明らかにすることが最優先だと思えた。事実、あの情報を今の段階で警察や何かに届け出たとしてもどこまで信じてもらえるか疑わしいと思えたし、何より俺自身も昨日読んだ彼の手記を前にどうすればいいのかまるで見当がつかなかった。――ただ、それでもどんな方向に転がったとしても後悔しない覚悟だけはしてきたつもりだ。
　ようやく辿り着いた一軒のビルの前で、息を整えて自分自身に強く言い聞かせる。自動ドアをくぐり、開けた世界で待ち受けていたのは立派なオフィス、立派な応接室。けれど行き交う人々はどこか忙しなく足早に通り過ぎ、どこか空寒い印象を受ける。こちらもどことなくせっかちな足取になりながら、受付に短く『博士』の名前を告げて対応を待つ。
　その間に、近くにあった窓ガラスに映った自分自身を上下隅から隅まで見渡した。落ち着かない心を、少しでも他に注意を逸らすことで静めたいらしい。今着ているのは、カジュアルすぎない適当な私服――白いワイシャツと黒いズボン。キャトルには学校だと偽って家を出てきた。手にした荷物にはここに来る途中、駅のトイレで着替えてきた制服が入っている。
　やがて俺がそれを見ているのにも飽きた頃、一人の女性が対応に現われた。彼女は自らを博士の秘書だと名乗り、俺を上階の個室へと案内する。ぱっと見優秀そうなキャリアウーマン、という印象だった。ただ、服の上からでも分かるその均整の取れたスタイル、着ている高級そうなスーツ、長い足を覆う黒いストッキングなどが職業人を想像させない妙な艶かしさを持っている。
「ごめんなさい、しばらくお待ちいただける？彼、すぐに来ると思うから」
　そう言って、彼女は一旦部屋を後にしようとした。問うべきかどうか、激しく迷う。ただ、訊くなら今しかない、と思う間もなく
「本当に、来るんですか？」
　口が咄嗟に、そう声を出してしまっていた。もう後戻りはできないらしく、続けて正面から、目を見て問いかけるように問いただす。
「――来れるはずありませんよね？博士……奥田千晶氏は、もう既にこの世の人ではないんですから」

意を決して口にした俺の言葉に、眼前の女性は特に目立った動揺も見せなかった。ただ、形の良い整った眉が片方、ほんの少し跳ね上がっただけ。

……昨日読んだ手記は、最後の一文がこんな言葉で締めくくられていた。

《――かつてない絶望。これ以上ない怒りと、憎しみと、後悔。もはや私は生きていることに嫌悪感すら覚える》

それはすなわち、辞世の句。もちろん百パーセントの確信は持てなかったが、おそらくそれでももう手遅れだろう、と俺は心のどこかでおぼろげながら推測していた。

「へぇ、驚いた。何処まで知ってるの？」

そう言って女は、顔に浮かべた笑みを濃くした。同時に、その眼差しが刺し貫くような鋭さを見せてくる。

「博士が自身に起きた出来事を全てつづったと思われる手記を全部読みました。だから……」

「奥田の知っていたことは全部分かる、って？……困ったものね、それじゃ本当にほとんど全部じゃないの」

書かれていたのは、本当に『すべて』だった。自らのフルネームや出身、経歴などはさることながら。前半は主にキャトルの前身となるプログラムの製作状況の詳細な記録。後半には、“真実”を知ったが故の博士の驚愕と絶望が、そのまま感情の赴くままに書きなぐられていた。同時に固有名詞を挙げて、非難されていた人物や団体。それを見て真実を知って、さすがに俺も驚きを隠せなかった。

舞台に上がったのは、先進国八カ国に支社を構える一大国際電子機器メーカー。それは表向き、新商品の開発業務という名目で行われていた。博士はそのプロジェクトに外部から招聘されるという形でメンバーに加わった。

「悪い子ね。知らない方がどれだけ身のためだったでしょうに」

目の前の女は、そう言って紅く塗られた唇をどこまでも愉快そうに吊り上げる。その戯れるような声が、気に障るとか言うよりもまず先に、純粋に恐ろしい、と感じられた。

――けれど、実際にそこで進められていたのは。許し難い犯罪行為。具体的に言うなれば、世界中のありとあらゆる組織に対しての不正アクセス。ハッキングを仕掛けてデータを盗み出し、あるいは時に改竄・破壊させる悪質なウィルスの研究。……博士でなくても、それは絶望の淵に立たされるこれ以上ない衝撃だっただろう。

「なんで……どうしてこんなことを？」

俺は思わず、そう声に出して問いかけていた。

「おかしなことを聞くのね？理由なんてないわよ」

上がった声は、見下げるような調子さえ含んだ狡猾さだった。

「『何故？』なんて、そんなこと考えるだけ野暮だし無駄よ。この試作品は使いようによってはどんな高度なセキュリティの情報でも得られる可能性を秘めてるし。優秀なプログラムなんてものは、行くところに行けばどんな莫大な富と引き換えにしても手に入れたい、なんて連中腐るほどいるわ」

「違う……プログラムは金儲けの道具なんかじゃない！！ましてや、人の生活を脅かすようなものであっていいはずがないだろう！？」

キャトルの作成者だって言っていた。彼らにとって、『自分の作り上げた作品』は、芸術品にだって等しいんだ。けれど『博士』には、そんな意図一切知らされていなかった。おそらく彼は至極熱心に、一途に、プログラマーとしての限界に挑戦し続けた。彼は一心に、自分のプログラムが明るい未来を切り開くと信じていたのだろう。自身の、ひいては世界中の人々の。
「ところで、あなたのことはもうとっくに調べがついているのよ？秋山……恒一くん？」
思わぬところで名前を聞かされて、一瞬心臓が引きつるように波打った。
「こんなこともあろうかと、博士にも極秘裏で彼のパソコン上にちょっとした仕掛けをしておいたの。万が一にも彼が自作のプログラムを第三者の機関に送信するようなことがあれば、その送り先を記録し、会社側に知らせるような絡操をね」
彼女の目は真っ直ぐに、躊躇なくこちらの思惑を見透かしていた。
「彼も思いの外用心深くて、データはいくつものパーツにバラバラに分断されていたわ。私たちはその中でも、特に重要な核となる部分を追跡・調査した。それがたまたまあなたの家に送られたデータだった、というわけ」
表情は確かに笑っているのに、相手を強力に威圧する、そんな矛盾した顔色。交わした視線だけで、背筋が一気に寒くなる。
「勘違いしないでね。データの一部だけとはいえ、あなたが見たのはそのなかでももっとも重要な部分の一つ――まぁ、人間で言うところの『自我』みたいなもの、と思ってもらえれば早いのかも」
「……それで？俺たちを一体どうする気です？」
負けじと残り少ない気合で投げかけた問いは、あっさりと軽い声音で返される。
「別に、どうする気もないわ。私が必要としているのはそのデータのみ、あなたがそれをおとなしく渡してくれればそれ以上危害を加えるつもりはない」
「じゃあ、断る、と言ったら？」
「分からない坊やね。あなたには最初から選択権なんてなくってよ？」
そして女はまた笑う。――それは疑いなく信じ切っている表情だ。自分自身の計略が、謀略が絶対に成立して揺るがないものだと。無論、それに対して俺はあまりに無力で、無様で脆弱すぎる。
思わず目線を逸らして俯いたところで、ふと服の内側が震えた。――懐に入れた携帯電話が振動しているのだ。取り出して、机の下で開ける。すると、画面の中には驚くことに『彼女』がいた。
「きゃと……っ！？」
思わず声を上げかけた俺に、唇の前に人差し指を立てて、向こうは落ち着くよう求めてくる。かと思えば突如画面が切り替わって、メールが一件届いた。差出元は、俺のパソコンのアドレス。
『ごめん、全部聞いちゃった』『今朝コーイチの様子がなんか変だったから、ずっと携帯電話で動きを追わせてもらってたの』
……なんだ。俺が必死に彼女には悟られまいとしていたのに、どうやら意味はなかったらしい。一層落胆する俺に、

『私にひとつ、考えがあるわ』
　メールの続きには、この場を打開する彼女の名案。
「――分かりました」
　携帯を閉じて、俺は女に向かってそう返事をした。
「ここから俺の自宅のパソコンに繋ぎます。この部屋のものを借りてもいいですか？」
　俺の変わり身の激しさ――あまりのおとなしさに女もさすがに訝ったが、それでも断る理由もないだけにすぐにそれを受け入れた。部屋の中のデスクトップをひとつ立ち上げて、俺に譲る。俺は、といえば携帯で彼女に指示されたそのままの手順で、部屋のパソコンを自宅のものに繋いだ。
　回線を開いて、準備が出来た旨をメールで返信する。それに対して、いつになく反応は遅かった。ややあって、自宅のものと同様に画面いっぱいに彼女の姿が映し出される。
『ありがとね、コーイチ』
「……なんだよ。らしくないな。どうかしたか？」
　そのどこかぎこちない態度に思わず話しかけるが、あいにくこの部屋にはスピーカーはあってもマイクがない、こちら側の声だけが届かない、ということに気が付く。
　それからふっと、画面の彼女は微笑んでみせた。技術的な問題だろうか？心なしか、画像が粗い。動きも完全にぎくしゃくしてしまっている。同時に画面を砂嵐がちらついて、時を経るごとに映りが悪くなっていく。
「――ごめんね、コーイチ。多分あなたは怒るだろうから、先に謝っとくね」
　雑音交じりの声。電波障害を起こしたテレビのような、視覚を惑わすぶれた映像。
「だけど、意地でも止めてみせるから」
　最後の瞬間、見えたのは強気な笑顔か、寂しげな微笑か――。愚かなことに、その時になってようやく俺は何かがおかしい、と気がついた。
「おい、キャトル――」
　話しかけても、当たり前のように反応は返ってこない。数十秒沈黙して、それに応えたのは。
　――直後、突然部屋の電話がけたたましく着信を響かせた。次に女の懐から携帯電話の着信音、以後続々と後を追うように部屋の外から、廊下から、電話のベルがおびただしく重なるように鳴り始める。
「なっ……！？」
　それを受けてはじめてパソコンに触れ、女はキーボードをせわしなく叩き出した。
「信じられない……ここのセキュリティシステムを全部看破してるですって！？」
　やがて、見ているうちにその様子から会社の内部情報、それも本社だけにとどまらず外国の支社、ここ以外の支店の情報もことごとく外部に流出しているらしいと分かった。俺も近寄って、横から画面を覗き込む。ふと繋げたテレビ回線に、ちょうど流れるテロップと緊急ニュース。ネット上でも早くも反応が巻き起きつつある。
　――世界中に、犯罪の事実と証拠がばら撒かれている。もはや今から何をやっても手遅れだ。俺は警察を呼ぼうと電話に手を伸ばしたが、意味がないと悟って元に戻す。部屋には、愕然と床

に崩れ落ちる女が一人。言葉そのまま、茫然自失と言った様子だ。逃げる気配もない。あるいは、逃げる理由もなくなったのか。
「お疲れ、キャトル」
　すべては、慌ただしくも解決したようだ。ほっと心を安堵させながら、彼女を労おうと俺は再びパソコンの前に立った。……が、いくら通信しようとも向こうからの反応は一切返ってこない。不審に思う俺に、
「無理よ。もうそのプログラムは使いものにならないと思う」
　後ろでぽつりと、切れた糸のような細い声が上がった。
「ここのメインシステムには、外部から不正にアクセスしてきたコンピュータに対して強力なウィルスを感染させる機能が記録されているから」
　それだけを言って、女はまた黙り込む。知らされた事実に、俺は為す術なく画面を眺めやることしかできなかった。
……おそらく、いや確実に。キャトルは分かっていてそれを実行した。彼女は、守ることを選んだ。自分ではなく、他人を。他者を。――前代未聞だ。目的を遂行するためなら、自らを破壊することも厭わないプログラムなんて。自らの意思でそんな不都合な選択肢を選ぶプログラムだなんて。他人を助けることで、自分の意義が果たされたと解釈する機械だなんて――。
　机の上に置いた両手を、ただただやるせなくて握り締めた。
「……私、本当に博士のそういうところが一番大嫌いだった」
　唐突に、静かに漏れる声。部屋に落ちた静寂に、疲弊した意識は全て委ねられていった。

講義を終えて、俺はその日も真っ直ぐ帰宅した。
それは一体、いつから日課になったんだったか。家に帰ってそのまま自室に閉じこもり、パソコンを立ち上げて作業を行う。特に今日は立ち上がるまでのその僅かな間さえもどかしく、じれったく感じられてついついキーボードを連打してしまう。
――あの日。実は、被害を被ったのは『キャトル』だけではない。家に帰ってみたら、自宅のパソコンがわけの分からないタチの悪いウィルスに感染させられていて、修復不能なまでに陥っていた。数日後に結局、購入して一年経つか経たないパソコンを破棄し、新品に買い替えることになる。……まったく、今思い出してもいい迷惑だ。
それからいろいろ考えた。いろいろ考えて、悩んで、そして決めた。以来、『博士』の出身大学、関わった企業、会社・組織などをひとつひとつ地道に当たっている。無論、もし研究データが残っているとすればそれを譲ってもらうか、もしくは参考に見せてもらうために。
そして今日、やっと以前から交渉し続けていたひとつの企業から研究データの貸し出しを受けられた、というわけだ。これに際してはその代わりに俺の作ったプログラムを譲渡する、という条件がついていたけれど。
早速ロムをセットして、本体に読み込ませる。表示された呼び出し時間に、その間何もせずに座っているのも癪だと思えて一階に下りて、コーヒーを淹れて戻ってくる。それでも今しばらく、時間を持て余してしまう。結局、最後には先程から足元でふらふらこっちの様子をうかがっていたユカワの相手をすることにした。引き出しからまた新しく買った猫じゃらしを取り出して、しばし彼女と戯れる。……しかし、すぐに飽きたのかくるりとこちらに尻尾を向けると容赦なく部屋を出て行ってしまった。うぅむ、これもお気に召さなかったか。
ユカワにも見捨てられて、とうとう本気でやることがなくなってしまう。迷った末、今度は鞄から教科書を取り出して机の上に広げた。こんなことがなければ、自宅で課題などしないのだが。
――あぁ、そういえばおかげで俺はあれから毎日休まず勤勉に学校に通わなければならなくなった。けどもう、それを苦痛だとは思わない。それが、自分自身で選び取った道である以上。俺みたいな一介の学生にできることなんてたかが知れてるし、その限界を見るたびにいつだって何もかもが嫌になる。それでも、諦めたらそこで終わりだと思うから。
そこで短く機械音が鳴って、ディスクが自動的に吐き出される。俺は『彼女』を呼び出して、キーボードで話しかけた。
「どうだ？新しいプログラムは使いこなせそうか？」
「最低限は。しかし、これを応用するのにはまだ長い時間を要しそうです」
画面に現われるのは、黒い髪、黒い瞳の少女。古い絵本から画像だけを借り受けてきたものだ。できるだけ彼女に似た外見を探したつもりだったが、結果的に似ているかどうかは分からない。
すると、画面の向こうで彼女がにっこりと笑った。動画を扱いこなせるほどの技術はまだ俺にはないから、笑った表情のイラストに画面が差し替わる、という表現をした方がイメージ的には近いだろう。『キャトル』には追いつかず、いまだ『博士』には遠く及ばない。特にこうした画像の扱いや音声データなどの技術面ではまだまだ苦労が多い。

「こーいち。今日は何の日か覚えてますか？」
　文字で問いかけてくる彼女に、俺も文字で入力し返す。
「もちろん。お前を作って、一年目だな」
　はにかんだ格好のままで、彼女が嬉しそうにゆっくり頷く。
「はい、誕生日プレゼント」
　俺はフォルダから画像データを引き出して、彼女のプログラムに添付する。当然、アイツとは違って彼女には自身で画像を処理する技術も能力も思考もないから、上手いこと画像処理したアクセサリを彼女の画像に重ね合わせる。
「わぁ、ありがとう。大切にしますねー」
「これからもよろしく、『レイ』」
　それでも、行けるところまで試してみたい。『ゼロ』と『イチ』の間で、どこまで行けるか、どこまでやれるのか。自分の可能性は、自分自身で導き出すしかない。それはきっと、人に与えられた最大の――。
　……そうだ、今度の休みには彼女に外を見せてやろう。新しく買ったデジカメで街の様子でも撮って。あれから随分繁華街の景色も変わった、話題には事欠かないだろう。
「どうだ、お前も外に出るか？」
　投げかけた問いに、部屋の隅に置かれた座布団、その上で後ろを向いた彼女の尻尾がふらふら気まぐれに揺れていた。

〈END〉